

## 男女共同参画委員会企画 JOYFUL通信

## ◆◆◆ 整形外科と医学生の視点 ◆◆◆

東京女子医科大学医学部医学科医学教育学講師

山内 かづ代

超高齢社会を迎え、筋骨格系疾患の外来受療率は上昇しており<sup>1)</sup>、筋骨格系疾患が原因で要支援・要介護となる方は増加の一途である。この現状より整形外科医の需要は高まる一方であり、一人でも多くの整形外科専攻医が求められる。

筆者は1999年に千葉大学整形外科に入局し、臨床、基礎研究の経験を経て卒後13年目から医学教育に携わるようになった。整形外科専門研修改善の目的で、2017～2018年に臨床実習中の医学部5・6年生を対象に、専門研修（入局）の選択で重視したい点を複数選択式で調査した（有効回答者数男性68名、女性44名）。上位10位は、①疾患・領域への興味（87%）、②医局の雰囲気が出る（59%）、③科・医局の人間関係（48%）、④丁寧な指導（45%）、⑤多数の専門症例（33%）、⑥出産・育児・介護への理解（31%）、⑦臨床のみならず基礎研究が可能（26%）、⑧活発な学術活動（学位取得、学会発表、留学等）（24%）、⑨明確な勤務体制（23%）、⑩目指すロールモデルの存在（21%）、であり、この中で男女間有意差のあった項目は、「⑥ 出産・育児・介護への理解」（ $P < 0.0001$ 、女性が高値）、「⑦ 臨床のみならず基礎研究が可能」（ $P < 0.001$ 、男性が高値）

であった。一大学での調査であり妥当性の検証は必要であるが、今の医学部生の視点として参考になる部分は多い。

筆者自身が整形外科医として研鑽を積む中で、専門医取得までの段階で研修先、経験症例などの仕事の量、質ともに性別による機会の差別が全くなかったことは、意外であったが有難かった。高いプロフェッショナルリズムを持つ多くの先輩の元で仕事をし、アクティブな同僚後輩と切磋琢磨する中で、整形外科医としての基盤を築くことができた。整形外科の知識技術の習得はもとより、学術活動への知的好奇心やモチベーションが昂り、その後の研究、学位取得、留学、後進の教育へと挑戦し続ける礎となっている。大学院時代に学位取得と妊娠出産が重なった時は苦労したが、その際は様々な配慮をしていただいた。マタニティ白衣の支給があったことは些細であるが嬉しく、研究の進捗、学位発表のタイミングは上司に何度も相談に乗っていただき無事に修了できた。出産時生死の境をさまよう事態があり一時療養したが、復帰する際に「一度取り組み始めたことは多少の困難があってもめげずに続けたほうがいい」とことや「いろいろなサポートを使って頑張って常勤勤

務への復帰を」との励ましをいただき、勇気付けられた。医局員の性格や事情を鑑みた前向きなアドバイスを継続的にいただいたことで今の自分が存在している。

現在、母校である東京女子医科大学に勤務し多数の女性医師を育成する立場になった。整形外科をはじめとする外科系に興味を持つ女性医学部生が明らかに増えている一方、従来の外科系のイメージや情報不足で迷う学生も多いことに気づく。整形外科専攻医を増やすためには、指導医側、学生・研修医側の男女を問わず、医学部カリキュラムや初期臨床研修プログラムを活用して整形外科領域の臨床・研究の魅力を伝えること、出産育児介護のニーズや個人の働き方に組織として配慮があること、指導的立場の医師が若手のロールモデルとして活躍し継続的なアドバイスをする機会を持つこと、などが望まれる。学会、医局、臨床研修病院などの信頼できるソースからこれらの情報を発信することもまた意義深い。その結果として、筋骨格系有訴者の増加する「今の」超高齢社会を支え、互いのワークライフバランスを支えることになるであろう。

1) 厚生労働省・平成26年患者調査の概況